

族日記より——昭和十年八月米國經由渡仏、十一月歸朝す——

長岡半太郎

スピード時代

予は九月初めにサンフランシスコに着き、米國を汽車で横断して、パリに向つた。途中グレート・ソールト・レークを過ぎた。本年は三十五年来の渇水で、鹹湖^{かんこ}周囲の塩は著しく乾燥し、大平原が草木もなく、艶消^{つやけ}し硝子^{ガラス}の如くひからびていた。そのころサー・マルコム・キャムベルはこの固まつた塩の上で快速自動車の試験をなし、一時間四百八十キロメートル余（大阪と国府津間の距離）のスピードを出し、世界記録を破つた。空中飛行ならば兎^とも角^{かく}も、地上この驚くべき速度で車を馳するに至つたのは、スピード時代に相応^{ふさわ}しい感があつた。

三層四夜を費してニューヨークに着いたが、途中田舎路が鐵路と並行しておれば、自然自動車に会い、流線型のものは汽車を追いぬいて走るに少々驚いた。十月に歸朝するときには特に眼を鋭くして觀察したが、矢張り同様であつた。日本では汽車のスピードが米國のよりは概して遅^{おそ}いに拘^{かか}らず、自動車は汽車に追越さる。これは道路が狭隘で、また起伏が多いためであらう。米國ではこれに反し、舗装された平坦な道路が多いから、東西の対照が甚だしく相違するも無理は無い。自動車は米人家庭には必要品である。

馭者^{ぎよしや}は家庭の人がやる。少しぐらいの損所は自分で修繕する。農家で自動車を備えないものは余程の貧乏百姓である。農産品を市場に出すには自動車が必要。村落と都会との距離は概して遠い。買物をするには自動車を利用せ

ねばならぬ。遅い支線の汽車ではまどろこしい。ピクニックに出るにも、山紫水明の地を撰えらび、家族一同歡樂を盡つくすに便利である。日本のように自動車に高い税を課せられ、馭ぎよ者を雇い入れる始末では、到底貧乏人には話にならぬ。米国では、大学の小使でも一台は持っているのを見れば、社会状態の異なる点が自ら判明する。

帰りしなにカリフォルニア大学に立寄り、その世界随一の輻射実験室を見た。ローレンス教授の創意になる機械で、元素変換試験を行っていた。この装置は目下他に比類なき好成绩を挙げているのである。米国の各大学に限らず、英国ケムブリッジからまで物理学者が見学練習に来ていた。

その中にエール大学教授クックシー氏が、自動車でその辺り乗り廻していた。失礼ながら、その車はここで御求めになったのかと訊きくと、いや私はこの車を馳せて、米国の東端に在るニウ・ヘーヴンから、遙々西部のサンフランシスコまで乗り込んだのだ。別に不思議はない。急行列車に乗っても四日はかかる。私は途中ホテルに宿して、七日でここまで来たのだと、当り前のことのように答えた。予はその大胆なるに肝を抜かれ、然しからばロッキータネヴァダの山脈を乗越されたのかと問えば、勿論のこと、景勝の地に至ればその風趣を賞して記念写真を撮り、疲れば休み、気儘にして半ば遊覧旅行をやったのだ。エールに帰る時は、来た時と別路を採り、愉快な自動車旅行をやるのが楽みだと答えた。これで見れば、米人と日本人との心境の異なることが判然する。予も自ら自動車を運転し得ば、幾分かスピード時代の人間になることが可能であろう。

鹹湖かんこの塩原でレコードを作ったキャムベル氏は大西洋を横切る時、マジエスチック号に予と同船して、しかもその経験談をなしたのであるが、自動車の運転など聞くにおよばず、馬耳東風に附したのは今から思えば遺憾である。また将来普通用の自動車と道路とが改められて交通が便利かつ安全になり、航空機もまた相ならんで発達するのであろうが、積載量、安全率、搭乗者の苦楽、価格、天候等において何れを撰えらぶべきかが問題である。米国鉄道の支線が現今悲鳴を揚あげているのは自ら判明する。

歐洲の不安定

ヨーロッパの各国が軍事研究に汲々たるは出発前から耳にした。九月パリに着いたころはソヴェートで挙行した、飛行機で兵隊を輸送する練習が話の種となっていた。道路を開き兵を送るは従来の遣り口であるけれども、敵の背後を衝き、或はその側面を襲うには、尋常に道を作つて進軍するは困難である。飛行機に兵隊を乗せ、空中よりパラシュートで降せば、何の雑作もなく実行し得る。敵を前に控えて戦いを交えつつ進むより、空路に頼れば山頂でも谷際でも、思う処に兵を動かし得るは論ずるまでもない。

ソヴェートの如く四千機も備えている国では、一師団の兵を動かすには、この流儀によれば容易の業で、航空の新利用法であるから人の注意するところとなつた。然したとい平時には朝飯前の仕事であつても、イザ戦争となれば敵も必ずこれに備うるは勿論だ。結局飛行機間の争いとなり必勝を期し難い。まず敵の飛行隊を一掃した後の行動であることを忘れてはならぬ。これを防ぐ術を講ぜず、徒らに危惧の念に襲われるは反つて愚なるに近い。

伊工紛争に伴い、イギリスは盛んに軍艦を地中海に派遣して要所を固めた。イタリーに最も近いマルタ島の港の入口は殆ど封鎖され、スエズの口と地中海の咽喉、ジブラルタルとは嚴重に監視せられ、命令一下、数十の朦朧は何所に集中するや疑問に属した。

イタリーが戦端を開いて後数日、ムツソリーニは獅子吼し、その熱烈なる弁論を全国に放送した結果、政局はいかに変転するか誰もこれに答うるに躊躇した。世界大戦にイタリーが聯合軍に予し、六十五万の犠牲を払つて得たる代償は、アフリカの一角とアドリアチックの一港に過ぎずと述べるに至つては、英仏に対する怨嗟胸中に燃ゆるを感じしめた。予はこの演説を読み思わず「ムツソリーニ反身になつてムツと立ち」と叫んだ。この切歯扼腕、国民の精神を鼓舞し、公憤を発揚するは政治家の常識であるけれども、一方退いて考うれば、あまり劇的で、そのいふところと、なすところとは自ら相撞着するのではないかを怪んだ。

イタリーは出兵することに、兵隊何名、人夫何人、トラック何台と大ぴらに公告した。敵に兵員を知らずするは得策ではあるまい。なぜこれをカムフラージュしないのか全く不明であった。一体日本人のやり方は、不言実行主義であるが、イタリー人は鐘太鼓鳴り物付きで戦に出かける。相手が黒人であるから、こんな威風堂々たる挙措に出で、虚喝で攻略をほしいままにするつもりかとも推測された。

また誤ってイギリスがイタリーを攻むようになれば、スエズ運河の口は扼せらるる。イタリーの飛行機がこの難関を突破するに成功せねば、二十五万のイタリー出征軍は囊の鼠に均しく出るに路なく、アフリカの荒野に乾干しになるより他はない。これはアドワの怨みよりひどい苦手である。その場合に、フランスはイギリスに対してどんな行動を取るだろう。一緒にイタリーを攻むれば長い間仲好しであった善隣を失う。イギリスと行動を同じくせねばドイツが復讐戦を企てるは、鏡に照らして見るより明かである。他方には、英仏ともに聯盟の手前もある。フランスの立場は実に真の非常時に遭遇したといわねばならぬ。政界の雲の行方は暗澹で、予の如き素人でもこの不安定の状況を観察し、いつ疾風迅雷に驚かさるるかを気づかった。他国人ならば雲煙過眼と見流しそんなことであるけれども、その禍乱に遭遇せんとするフランスは戦々競々として不戦を標榜したのは当然であった。

歐洲人が最も恐がっているのは、戦端を開くとともに毒ガスの襲撃あり、これに続くに、爆弾と砲撃とをうくるにある。市街に毒ガスを撒かれ屋外に踏み出ることが危険となれば、窓を目貼りして屋内に空居するのはその書を避くる便法である。

もし毒ガスの吹き散らないうちに爆弾と砲撃とを加えられるれば、一家族室内に籠り皆殺しにさるるおそれがあり、屋の内外ともに危険で進退惟れ谷まる状態に陥る。ただ一つの遁路はパリの如き密な地下線網が設けてあれば、坑道にはいつて難を避くるが簡単である。しかしパリの坑道には通風装置がないから、坑道内に毒ガスを投ぜられるば、またみな殺しになる。軍事研究の盛なる時節だから、毒ガスに数百種あつて、所と場合とを適応に扱えば人を

殺すは草を薙るより容易になつたと噂さるる。

若し。パリのごとき大都市が襲われるときは、その凄愴なる結果はいうべからざるものがある。兵士が屍を戦場に曝すは職分であるけれども、兵器の発展に伴い、その惨禍は老幼男女の別なく屠場の牛羊に均くなる訳である。昔征服者が城市の人民を塵殺した歴史は残っているが、今度歐洲に戦乱あれば、形を異にしてその残虐を繰り返すのである。恰も昔用いた甲冑がその質を違えて戦闘員に使用せらるるに均しく、戦争の害毒もまた、昔時に立戻りつつあるは文化の進歩といわんか、退歩といわんか、国民は須らく考慮すべき問題である。

世果大戦に当り、国民の数に比例して最も多く壮丁を失つたのはフランスとドイツである。昨年は大戦の始めから二十年目に相当する。従つてその年に生れた男子が徴兵に応ずべきである。今年の如きは両国とも応募兵員に多数の缺陷があつたと噂されている。これでヒットラーが盛に婚姻を奨励する意味は読めたように覚える。もし両国に同様な難関無く、何れかが優勢であつたならば、雌雄を決するに時至れりというべく、すでに干戈を動かしたに違いないが、この弱点は両国の均衡を平にする素因であるかと推察せらるる。素人の下馬評は到底当るまいが思いついたままを書いて見た。

巨船ノルマンディー

フランスに着いて直に感じたのは、鉄道線路の著しく改善されたことである。大戦直後の軌道は甚だしく歪曲して、食堂車でスープがこぼれ、葡萄酒壺が倒れ、頗る不愉快を感じたに反し、近年は車の動き滑かで、そんな憂いは全く除かれた。また停車場にはフラッド・ライトの照明が準備してあるのを見れば、これも戦時の用意かと思われた。

パリに入れば四年前に比し少しく不景氣の兆があつた。シャム・セリゼーの広道にカフェーが新に増加したのは、

賑やかになつた証拠ではなく、反かえつて景氣附けの策であるかと疑われた。その他は「トロカデロ」の樓閣を毀こぼちて、一九三七年の博覧会の準備に取りかかるくらいのもので、變つたところは至つて少かつた。研究所を尋ねても、經費不足の嘆あるのみで、これぞ珍しと考えられるものは稀であつた。また電気諮問委員会、度量衡會議に出席しても、案の可否を討論し将来の發展を議するに過ぎず、各国より提出されるものは踏襲せる実験方法による測定値に止まり、新しき發展を含むものは殆どなしといつて差支えない。もしこれが四十余年前であつたならば、見るもの聞くもの珍しく思われたであらうに、今日となつては、何やら陳腐臭くて、利益すること僅少なるを覺えた。むしろこの日数を故国で研究に費したならば、より以上の成績を挙げ得ること疑いを容れないのである。

着仏十日も出でぬに歸心矢のごとく、歸去来兮かえりなんいせ、研究まさに蕪あれんとす。華の都に長居は無用、長居をすれば、財布は空し、氣はいら立つ、研究などはそつちのけ、一日早く歸れば、成績はそれだけ上る。パリ料理は口に合ひ、カラムベアの味はよし、これに引換へ、故郷の仕事の味を比ぶれば、泥と雲との違いあり。いざ歸りましょうとは科学者の寢言、寢言ぐらいじゃありません、ほんまにそれや、異国夷人は口はよい。偽り言やら実やら、腹の底探つて見れば不可思議な塊ありと察せらる。この診断は誰に訊こう。訊かずと知れる話ぶり、顔の色にもありありと、わかる笑顔や顰しかめ顔つら、何の躊躇ちゆがいろいろかい、安全ならば飛行機で、一瞬早く歸りたい、念願に驅られて、四週問滞在の後、巨船ノルマンチーで大西洋を横よぎることに決した。

この船は読者がすでに知らるる通り、世界最大の客船である。全長三百四十四メートル（一一〇二九フィート）、幅三十六メートル半（一一九フィート）、総トン数七万九千、排水六万七千トン、十六万馬力で毎時約二十九ノットを走り、一日重油千二百トンを燃し、船客は一等九百名、二等六百六十五名、三等四百六十八名、船員千三百五十五名を收容し、フランスの誇りとする、阿房宮を浮べたに均しい海上の殿堂である。三千人の村落はかなり大きなものである。従つて船の大きさも推測せられる。浮城の中には大路小徑の廊下が階段を伝わつて縦横に区劃せられてあ

る。案内者がなければ、はじめはまごつく。或る人が迷子になつて当惑し、海に出るにはどう行きますかと問うた、滑稽な話もある。しかし最も眼を驚かすは船客の食堂、休憩室、舞踏室、芝居、座敷、寺院、プール、花壇、射的場等である。

食堂入口の壁はオニックス大理石の眼を現した大板と、血色のフィンランド大理石とを張り詰め、その上に燈光はきらきら輝いている。内部は九百の船客と給仕とを容るるに足る大広間で、日本流に申せば千畳敷である。周囲は厚き艶消し硝子ガラスを、縦横に張り、中に長條の電球線を光らせ、壁の模様には、硝子ガラスに特別な艶を出し、団十郎の定紋を押潰したような型を現してある。その型は、近くより望めば、ぼんやりしているが、段々遠ざかるに従い判然と現われて来る。恰あたかも白玉殿裏に光輝絢爛たる感を生ずる。廊下も至るところ麩麵電球めんめんを用いて、両側とも天井近くから光が映る不夜城であることはいうまでもない。この珍らしき間接照明だけでも、一顧の価値がある。

船上で朝まだき、甲板の洗い水が乾かぬ先に散歩すれば滑つて困る。本船には碁盤型の溝をつけたゴム盤が隈なく敷きつめてあつて、踏み心地柔かに、倒るるおそれがなかつた。他船にはまだかくの如く用意周到でないけれども、ゆくゆくこの装置を施すようになるであろう。甲板の一端には大いなる花壇が設けられ、四季の花が咲いていた。常磐木もあり、仙人掌の大なるものもあつた。中央に二個のガラス張りの鳥籠の中には、駒鳥その他が巣くつていた。最も心地よく感じたのは懸崖の百合であつた。樋の如き青塗りの半筒が、扇型に輻射し、百合数百が根ぐるみこれに容れてある。無論樋は水を与えて流すためである。花も株も下垂している。花下に卓が並べであつたから、閑さえあれば、椅子に凭もたれて読書した。目前に桜草と黄菊と相接して艶を競うているのは奇異であつた。

通読した書は、フランス文士の著したゲートを大歐洲人と礼讃した二百ページばかりのものであつた。犬猿ただ啻ならぬ仏独の間柄に、こんな本が著されたから、奇怪の念に打たれて繙ひもといてみたのであつた。なるほどゲートは、小節に拘泥せず、ナポレオンを大人傑と欽仰した事実から出発している。仏人はお国自慢であるが、またその精神に

他国人も意気相投するものを嘆賞するのであつて、自惚根生もまた甚しく、その世界の中華をもつて、自ら任ずるは、無理ならぬところがある。仏語を喋らぬ人を田舎者と見るのも一例とすべしと考える。

プロメナード・デッキより休憩室に入れば、大なる昇降機が二個動いていた。その外覆には金装の唐草を鏤め、昔の大名御殿にでもそなえつけそうなものである。室内に大柱が幾本もあるが、金箔で蔽われ、しかもその表装は金屏風の如く、たくさんの箔をうちつけた痕跡がある。その模様は箔の界が一樣になつてないので雅致があり、さすがは、フランス趣味という看板を掲げている。四壁には古代の船舶から十六七世紀の時代物を描き、中に女を数多加えてある。皆フランス女で、やや近代式趣味を帯びているところは、少しく変だ。椅子は大きな牡丹の如き花草を織り出した布で張るか、然らざれば革で、あらゆる美を盡くしてある。かくして室の広さと天井の高さは、人を驚かし、装飾と四壁とは目を眩ませ、ルイ十四世か隋の煬帝でも立案したかを疑わしめる。

歌舞音楽は無論であるが、左のきく連中は、バーで陶然酔つている。また骨牌遊びに耽つている輩もある。夜になれば観劇に余念なき人もある。かくの如く宴遊に流連する船客ばかりかと思えば、射的の技を練るもあり、デッキ・ゴルフやピンポン等で時を殺すものもある。然しこれらの世間なみの樂を離脱し、超然として読書三昧、独りで笑つたり憤つたりしている仲間外れも見受けられた。概して一等船客の多くは、貴族か富豪である。その証拠にはイギリスのサザランド公爵、ニューヨークの銅王グッゲンハイム、その従者、侍女、乾新兵衛氏等が乗っていた。予の如き貧乏人が乗るべきでないことは当然であるけれども、一生に一度は富豪がどんな生活をしているかを覗くも教養であると考えた。これに類した乗客は三菱造船会社の両技師であつた。これは直接体験を要するので、予よりも緊切なる関係をもつていた。

一等室には差等があつて、予が占領したのは最下等なるはいうにおよばぬ。指定された室は船の中部に当り、二十畳敷くらいあつた。窓が二つあつて、その下に柔かなソファアが設けられた。室内は絨緞の上にさらに厚いのを

しき、ベッドを踏む心地がした。その他に用ダンス、テーブル、衣類押入れ二ヶ所、荷物置戸棚、洗面所、画、湯殿が附属して、贅沢なること、浮き御殿と称するが適當である。室の四壁と家具は皆金属製で、緑色に塗り、その中に雲が散らしてあつたから、さながら日本襖の感じを与えた。ベッドは折り返しになつて、昼間は戸棚と覺しく、衣裳入れの隣に納められ、夜は二重の絨緞の上に据えられた。船は少しもゆれないが、微に振動する。ベッドの上ではこの振動も鈍つて、列車内に眠るより安樂であつた。

ノルマンジーの振動は激しいと伝えられているけれども、さほどまでではない。反対会社の悪宣伝だと呼ばれている。もつとも予の室はCデックの中央で、安靜の位置にあつたからかも知らぬが、舵の近所へ行けば相当響き、中央部は却つて気持よく感ずる。試みに食卓上に杯を二つ隣接しめるときはチリンチリンと音がする。もし玩弄物の相撲取りを乗せたならば面白く活動するだろうが、試験するにそのものなしでいたし方なかつた。本船の時雨湯シユワー・バスは普通と趣きを異にして、出口は背中くらいの所に設けてある。淡水でも海水でも、温かくも冷くも勝手に加減される。最も注意してあるのは水の送りで、少しチクチクするくらいにすれば垢は全く洗い落とされ、後の心持が誠にいわん方なくよろしく、毎晩一浴して眠れば夢円かにて、寢覚めの壮快、復またと經驗し難い。

ボーイはフランス人で片言交りの英語を危く操る。間違いを来す恐れがあるから、仏語を用いるが得策だ。前に記した通りフランス語の話せぬやつは田舎者だという觀念はボーイにも滲透しているから、予の貧乏をあまり侮らなかつた。然しかし予の衣服ときては言語道斷、国産の羅紗ラシヤを、高等学校制服屋に縫わせたのだから、流行も何も遂おわぬ畜カラである。パリでその型は、十五年前のものであることを確かめ、いわゆるお上りのぼさんに違いないと悟つた。この体裁がおかしく見えたか、写真師が是非撮影させてくれ、船の費用でとるのだから一文もいらぬと、引ずりそうに花壇に連れ行き、フラッシュ・ライトで全身を写した。その後半紙判より少しく小なる立派な写真を持ち来りこの隅に署名し、船に乗つた感想を日本語で書き、仏訳を付けてくれと依頼した。それで率直に「浮き城の、光り

輝く浪を切り、渡る海路の、「心地よきかな」と記し、仏訳を添えて事務員に渡した。その後一ヶ月を経て、その写真に船長が自ら署名し、貴君をノルマンディー船客簿に録し、この写真を客帖に載せると記した手紙を届けた。これで見ると、お上りのぼりはんと卑んだ訳でもないようだが、同乗の他の本邦人六名は、なぜ写真帖に載せなかつたか不思議である。恐らく年長者を扱んだのであろう。

こんなくだらぬエピソードは記すに足らぬと読者は評せらるるを知っているが、ここに読者に紹介したきはかかる巨船に伴う危険である。タイタニックは初航海に氷山に触れて沈没した。こんな危険は極めて少いとして、昔ただ一つの推進機を備えていた時代には、その折れた時は進退の自由を失い漂流のやむなきにいたつた。今日では、巨船は少くも二個多くは四個を具えているから安心である。また舵手が舵の操り損いも危険の一つに数えられてあつたが、大洋を航海するには途中で島嶼とうしよがないから方向がきまつている。近年盛んに行はるるジャイロ・コンパスを備え、前もつて既定の方向に動くようにして、一度調節すれば、自働装置で舵を操ってくれる。それで舵手はコンパスの指す方向が狂わないかを監視するばかりで、昔日の如き労働をなす必要はなくなつた。全く隠居役に過ぎぬこのコンパスは、羅針盤のごとく磁力の偏差に冒されない。磁針は必ずしも真北を指さないことは、今日誰も知っている。広き大洋の中で、その偏差は変化し、殊に大西洋では、その開きがすこぶる大きいから、舵手の失敗が恐れられた。ジャイロ・コンパスがひろく用いられるようになってより、磁針と関係を絶ち、偏差はすこしの影響を生ぜぬようになったから、一つの危険は除かれた。太平洋で予が乗つて歸つた秩父丸も、この方法で航海した。

然ししか、どの巨船でも危険視されているのは火災である。これは未来永劫致し方あるまい。ノルマンディーではこれを慮り、衣裳箆笥から戸柵まで金属製にし廊下壁等に至るまで防火材を用いて用意周到であつた。近年数回火災に襲われた客船の惨禍に鑑みたのであろう。火災の場合、たといS・O・Sを発しても、救助の来るまで時間がかかり、また来ても消火には手伝いが困難だから、ただ船客を救助するが関の山である。それゆえ巨船は沢山の区画を

設け火事はその部分だけに局限するようになってきている。

大西洋は巨船の競争場裏である。優秀船の数多を所有し、航路の覇権を握っておるのはキュナード・ホワイト・スター会社である。近日ノルマンディーを凌駕するクエーン・メリー号を浮べて、これを圧倒せんと試みつつある。また米国では十萬噸級の超巨船の建造を企てている。これら諸船の競争は目醒しきものあるを予測される。思うにキュナードが僅かに一千噸の蒸汽船三隻をもつて、大西洋定期航海を創めたのは、九十五年前である。一世紀間の進歩は実に顯著であるといわねばならぬ。翻つて東洋における情勢を窺うに、大西洋における如く競争は激しくなはい。また快速船も要求されない。然し近ごろドイツ船で、大西洋を往復する優秀船に拮抗すべきものが、東洋航路を侵略し初め、日本の当事者も気が附いているは明瞭である。もしわが邦で建造された船が、引けを取るようでは、国威に関する次第である。環海の国民が痛心に堪えない情勢は刻々迫つて来た。

(昭和十年(一九三五)十二月「大阪毎日」所載)

- 長岡半太郎著『随筆』（改造社、一九三六年十一月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}2\text{pdf}^{\text{m}}\text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。